

# 『海』の過去、現在、未来について

## 有森信二

『海』の過去、現在、未来について、作品等の質や内容からはやや逸れてしまうが、現「編集・会計担当」としての側面から、その特徴に触れてみたい。

### 1 『海』の運営（第一期）の場合

(1) 『海』第一期は、「昭和六二年（一九八七年）九月一日に創刊号を発刊」し、第六十七号「平成二〇年（二〇〇八年）一月一日刊行」をもって、終刊になった。この間二十二年であった。

(2) 『海』第一期の運営は、「主宰」、「編集担当」、「会計担当」という三人の元で行われてきた。

第一期の主宰・織坂幸治氏は、「文学に真摯に向かい」、「優れた見識を持ち」、「社会にも大きな影響力を行使する」という方だった。織坂氏の卓越した指導力のおかげで、『海』第一期は広く知られ、同人が競って作品を発表することになった。

(3) 編集担当は、主宰の意向を受け、毎号の発行計画によ

り、具体的な「案内作成、原稿受、印刷原稿案作成、校正、印刷発注、送付、HP作成」という作業を行い、会計担当は同人費の「受入れ、支出、報告」を行った。

(4) なにより『海』の構成員は、侃々諤々の意見の交換のなかから得た「詩魂の発露」により、「命を張る」とでも形容すべく文学・文芸に真剣に向かい会ってきた。

(5) こういう状態で二十二年を経てきたが、構成員の高齢化等もあり、やむなく終刊となった。

### 2 『海』第二期の運営【現状】

(1) 第二期は、第一期の運営形態をそっくり受け継ぐかたちで、「平成二十一年（二〇〇九年）六月二〇日に創刊号（通巻第六十八号）を発刊」し、第三十号（通巻第九十七号）を「令和五年（二〇二三年）七月一日に発行」した。この間十五年である。

(2) 第二期は、第一期の終刊を受け、急いだ企画により、少人数ではあるが、「発表の場を持つ」ことを主目標として立ち上げ、「編集委員会」の元で運営してきた。

(3) 第二期は、次のような「理念と指標」を掲げ、同人個々が、なによりも自身の判断と工夫により「自由に作品を表現し、発表する」ことを目指している。

① 文芸作品を発表する場である。

② 作品を、広く、遠くに運ぶ場である。

③ 文芸を志す者同士の交歓の場である。

④ 生涯にわたり文芸にかかわっていくための場である。  
⑤ 同人個々をもつて主人公とする。

⑥ 文芸を志す者に、広く門戸を開放する。

(4) また、その特徴を次のように表している。

① 『海』の考えは、極めてシンプルである。

② 表現し、年に二回世に問う。―「年二回発行する」

③ これを「発、自、安」と称する。―「自由に（表現し）、発表する、安価で」の意。

(5) 第二期は、第一期終刊後急いで立ち上げたという事情もあり、「主宰」を選定し得ないまままで今日に至ったことで、第一期の織坂氏のような卓越した指導者には恵まれていないが、「編集委員会」がこれに替わり、新たな方式での積極的な運営を行っている。

(6) その概要は、「編集委員である同人も、そうではない同人も、何の区別も、差異も設けていない」ことにある。すなわち、同人は皆『海』の目標とする「表現すること」、「作品を発表すること」に向かい、自由に目指しゆく仲間であり、編集委員会や編集委員は、これらの目標を下支えするボランティアである、というものである。(7) 発行に当たっては、創刊の早い時期から、幸いに全国的レベルの数人の同人の参加を得て「かなりのレベルの冊子」を発刊してきた。

同人は、福岡だけではなく北海道、大阪、奈良、熊本、長崎など広範囲に居住しており、またコロナ対応のため、

第一期で行ってきた「合評会」を原則として開かず、同人のみに利用を限定した「交流掲示板」により批評、意見交換、情報伝達を行うことにした。また、普段の連絡、問い合わせ等も「メールの使用」を原則としている。

(8) 作品の制作、発表も同人個々の自発性に委ね、『海』への発表に限らず、広く商業誌や他誌への投稿を勧め、実際、多方面での活躍がなされている。

(9) 以上が、『海』第二期の十五年を顧みたとき（十五年分の高齢化が進んだという実情は否めないものの）、今も、どこまでも広がりがゆく「産」であり、「原初の海」であり、「天空の海」であることは変わらない。

この「開かれた自由無碍の『海』」が、これから何を産み出し得るものであるか、おおいに楽しみである。

### 3 今後のさらなる発展に向けて

(1) 以上、『海』第二期第三十号までの現状における個人的な意見を列記した。この間、同人諸氏から寄せていただいた多大な協力に感謝するとともに、第三十号以降がさらなる発展への道に向かうことを期待してやまない。

(2) なお、これからの「目標、目的」をどう考えていくかについても検討の余地があるう。

(3) 殊に、若い人の参加の工夫をし、若い同人が主体となった積極的な意見の披瀝により、新たな作品を競って発表していく「場」にしていたきたい。